中世自然哲学における《註解》の技法：

アルベルトゥス・マグヌスの「生成・消滅」論と，彼のアヴェロエス批判

アダム・タカハシ

「中世哲学研究（VERITAS） 第 35 号」抜刷　1 頁〜21 頁
2016 年 11 月　京大中世哲学研究会　発行

中世自然哲学における《註解》の技法：
アルベルトゥス・マグヌスの「生成・消滅」論と，彼のアヴェロエス批判

アダム・タカハシ

1. 序論

十二世紀後半以後、スペインやシチリアで生じた翻訳運動の結果、それまで論理学的著作しか知られていなかったアリストテレスの作品の多くが西欧の知識人の間で広く読まれるようになった。この古代ギリシアの哲学者の著作の受容のなかで重要な役割を果たした人物のなかに、アルベルトゥス・マグヌス（ca. 1200-1280）という十三世紀のキリスト教神学者がいる[1)]。彼は、中世から初期近代のアリストテレス主義の伝統を考える上で、特に自然哲学的問題への関心の深さによって、これまでも注目を集めてきた。というのも、アリストテレスの『自然学』や『天について』など理論的な著作はもとより、同時代のスコラ学者の多くは扱っていなかった『気象論』や『動物論』など、多くの経験的な内容を含む著作にかんしてもアルベルトゥスは詳細かつ包括的な註解書を残したからだ。

だが、アルベルトゥスが自然哲学的な議論を展開する際に、彼独自の著作を書くよりも、アリストテレスの著作の《註解》という形で議論を展開したことの意味は、必ずしも十分に注意を払われてきたとは言えない。他のスコラ学者同様に、アルベルトゥスの知的活動は極

[1)] アルベルトゥスにかんする基本文献としては、以下を参照。James A. Weisheipl (ed.), *Albertus Magnus and the Sciences: Commemorative Essays 1980* (Toronto, 1980); Alain de Libera, *Métaphysique et noétique : Albert le Grand* (Paris, 2005); Irven M. Resnick (ed.), *A Companion to Albert the Great: Theology, Philosophy and the Sciences* (Leiden, 2013).

めて「ブッキッシュ」（bookish）な性格をもっていた[2)]。彼にとって、アリストテレスの著作において何が述べられているのかを「註解」する、すなわちテクスト上の概念やアイディアを解読し説明する作業が、そのまま科学的な真理に到達することと同等の役割を果たしていたのである[3)]。したがって、アルベルトゥスの哲学を理解するためには、単純に彼の議論をまとめるだけでは不十分なのだ。重要なのは、いったい彼がどの程度アリストテレスの議論を受け継ぎ、そしてどの程度そこから離反しているかを正確に見極めることである。別の観点から言えば、アルベルトゥスの哲学の固有性というものが仮にあるとすれば、それはアリストテレスのテクストとアルベルトゥスのそれとの〈差異〉、あるいは前者に対する後者の〈余剰〉においてのみ見出されるのである。

さらに、もう一点あらかじめ注意を促しておくべきことがある。それはアルベルトゥスがアリストテレスの作品を解釈する際に、案内役が存在していたということである。その案内役となった人物は十二世紀スペイン・コルドバで活躍したアヴェロエス（イブン・ルシュド）（ca. 1126-1198）である[4)]。中世哲学史研究の文脈ではアヴェロエスが重要な人物であったことも常に認められてきたように思われる。しかし、いわゆる「知性単一論」と称される彼の霊魂論の一部の教義とそれに関するスコラ学者たちによる批判という論点を除くと、彼の

---

2) 初期近代までの学問が「ブッキッシュ」な性格を持っていたことについては、次の文献を参照。アンソニー・グラフトン『テクストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』（福西亮輔訳、勁草書房、2015 年）。

3) 中世の科学を、アリストテレスの著作に対する「註解」として見ることについては、Edith D. Sylla, “Walter Burley’s Practice as a Commentator on Aristotle’s Physics,” *Medioevo*, 27 (2002), 301-72.

4) アヴェロエス（及び彼の影響）について、本稿の主題に関わる基本文献としては、以下のものが挙げられる。Gerhard Endress and Jan A. Aertsen (eds.), *Averroes and the Aristotelian Tradition* (Leiden, 1999); Richard C. Taylor, “Averroes: Religious Diarectic and Aristotelian Philosophical Thought,” in P. Adamson and R.C. Taylor (eds.), *The Cambridge Companion to Arabic Philosophy* (Cambridge, 2005), 180-200; Jean-Baptiste Brenet (ed.), *Averroès et les Averroïsmes juif et latin : actes du colloque international (Paris, 16-18 juin 2005)* (Turnhout, 2007); Ruth Glasner, *Averroes’ Physics: A Turning Point in Medieval Natural Philosophy* (Oxford, 2009); Paul J.J.M. Bakker (ed.), *Averroes’ Natural Philosophy and Its Reception in the Latin West* (Leuven, 2015).

思想や、その後に与えたインパクトが十分に理解されてきたとは言えない。アヴェロエスはアリストテレスの議論を単に説明しただけではなく、この古代ギリシアの哲学者に見られる多様な議論を整合的な形で解釈し直した。さらに、本稿でも検証するように、彼はアリストテレスの哲学を《自然主義》的に解釈する傾向があった[5]。そこで提示された見解は、より後代においてアリストテレスのテクストを理解しようとする者たちにとって、最終的にアヴェロエスの見解に賛同するにしろしないにしろ、解釈の前提として機能したのである。

以上を踏まえて、本稿が議論の対象とするのは、アルベルトゥスがアリストテレスの著作をどのように注釈しながら、自然現象を説明する理論を展開したのか、そしてその際にアヴェロエスの註解書は彼にとってどのような役割を果たしていたのかということである。この問題を見るために、本稿では、特にアリストテレスの『生成消滅論』に対するアヴェロエスとアルベルトゥス双方の註解、そのなかでも「四元素」の「生成・消滅」についての彼らの議論を見ることにしたい[6]。「四元素」がアリストテレスの自然哲学の枠組みの中で世界を構成する最も基本的な要素であり、その元素の変化はより複雑な自然現象を説明する際の基礎的な理論を提供するからである[7]。以下では、まずアリストテレスの見解を簡単に整理した後、アヴェロエス、そしてアルベルトゥスの順に議論を検証していくことにする。

---

[5] アリストテレス主義の伝統における《自然主義》的（あるいは《物質主義》的）」な立場、およびそれと《形而上学》的な立場との対立という視点については、Kessler の下記の論考に大きく依拠している。Eckhard Kessler, “Metaphysics or Empirical Science?: The Two Faces of Aristotelian Natural Philosophy in the Sixteenth Century,” in M. Pade (ed.), *Renaissance Readings of the Corpus Aristotelicum: Proceedings of the Conference held in Copenhagen 23-25 April 1998* (Copenhagen, 2001), 79-101.

[6] アリストテレスの『生成消滅論』にたいする中世の註解の伝統については、以下を参照せよ。J.M.M.H. Thijssen and H.A.G. Braakhuis (eds.), *The Commentary Tradition on Aristotle’s De generatione et corruptione: Ancient, Medieval and Early Modern* (Turnhout, 1999).

[7] 元素の「生成・消滅」にかんする中世の論争に関しては、アンネリーゼ・マイアーの研究が依然として有用である。Anneliese Maier, *An der Grenze von Scholastik und Naturwissenschaft*, 2nd ed. (Rome, 1952), esp. 3-140.

2. アリストテレス『生成消滅論』における「元素」の「生成・消滅」

まず、『生成消滅論』における「生成・消滅」（γένεσις καὶ φθορά）に関するアリストテレスの議論の要点を簡単に整理する[8]。この著作の中で「生成・消滅」が論じられるのは、主に第一巻第一章から第三章と第二巻第一章から第四章の二箇所である。したがって、以下の論述も、この二つの箇所に依拠することになる。ただし、詳細に立ち入る前に、アリストテレスが自然の事物の「変化」（μεταβολή）を四種類に分類したことを前提として理解する必要がある（Cf. *GC* I.4, 319b31-320a7）。変化の四種類とは、「生成・消滅」（γένεσις καὶ φθορά）、「質的変化」（ἀλλοίωσις）、「増大・縮小」（αὔξησις καὶ φθίσις）、そして「場所移動」（φορά）である。そして、この分類は「カテゴリー」の区別に対応している。「生成・消滅」は「実体」（οὐσία）、「質的変化」は「性質」（ποιόν）、「増大・縮小」は「量」（ποσόν）、そして「場所移動」は「場所」（τόπος）の、それぞれ変化にあたる。

では、より具体的に議論を見ていくことにしよう。『生成消滅論』の第一巻第一章から第三章において、アリストテレスは過去の自然哲学者たちの学説を検討した後に、「生成・消滅」と呼ばれる変化は、「性質・量・場所」という（実体に依存する）「付帯的性状」の変化とは異なり、「実体」全体の変化であることを強調する（*GC* I.2, 317a23-27）。ここで重要な点は、この「生成・消滅」と呼ばれる「実体」の変化が、端的な無から何らかの存在者が突如

---

[8] アリストテレスの『生成消滅論』のテクスト及び邦訳にかんしては、次のものを用いた。*Aristotle, On Coming-to-Being & Passing-Away*, a Revised Text with Introduction and Commentary by H.H. Joachim (Oxford, 1922)、アリストテレス『天体論・生成消滅論』（村治能就・戸塚七郎訳、岩波書店、1968 年）。引用する場合は、*GC* と略記した上で、ベッカー版アリストテレス全集の該当箇所を記す。「生成・消滅」の議論にかんしては、以下を参照。Friedrich Solmsen, *Aristotle's System of the Physical World* (Ithaca, NY, 1960), 321-352; David Bostock, "Aristotle on the Transmutation of the Elements in *De Generatione et Corruptione* I. 1-4," *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 13 (1995), 217-29.

生成する、あるいは逆に或る存在者が端的な無へと消滅することではない、ということだ。あくまで、あるものが全体としてこのものから、あのものへと変化することでしかないのである。

今述べたことに関連して重要な点は、アリストテレスにとって「生成・消滅」という変化が相互的性格を有することである。彼にとって、あるものが「消滅」することは、同時に別の何かが「生成」することと同義であり、逆に、あるものが「生成」することは、他の何かが「消滅」することと同義なのである。この意味で、アリストテレスは「実体の場合には、反対のいずれか一方の生成は常に他のものの消滅であり、一方の消滅はもう一方のものの生成である」（*GC* I.3, 319a20-22）という。ただし、目の前の椅子が急に机に、あるいは机が椅子へと、または犬が猫に、猫が犬へと急に実体的変化をすることはないだろう。したがって、このようにしてアリストテレスが述べている「生成・消滅」という変化は、自然の事物一般の現象に関する説明というよりも、なんらかの特殊な事象について妥当するものでしかないと想定するのが妥当と思われる。実際、後に『生成消滅論』第二巻で論じられるように、アリストテレスがこの著作で扱っている「生成・消滅」とは、基本的に「四元素」（火・空気・水・土）の「生成・消滅」でしかなく、より複雑な自然の事物、例えば動物や植物の「生成 = 発生」の議論などは、この著作では扱われていないのである（さらに複雑な自然の事物、すなわち「動物」の「生成 = 発生」の議論は、『気象論』第四巻、さらに具体的には『動物発生論』等で論じられるだろう）。

アリストテレスにおいて「生成・消滅」という変化が、あるものから別のものへの実体的変化だとすれば、その変化の過程の前後の実体同士は、その変化においては不変のままとどまる何らかの原理を共有する必要がある。もしそうでなければ、結局、あるものが端的な無から突如有へと転じる、あるいは有から端的な無へと転じることになるからだ。したがって、アリストテレスの理論的枠組みの中では、実体の「生成・消滅」の過程で、この変化の影響を受けず、その変化の間にも不変なまま存在し続ける何らかの原理が要請されることになる。アリストテレスは、そのような不変の原理を「基体」（ὑποκείμενον）と呼び、それが「生成が絶え間なく行われることの質料としての原因をなしている」と述べた（*GC* I.3, 319a19）。

では、『生成消滅論』第二巻の議論に移ろう。そこでアリストテレスは、「四元素」の「生成・消滅」の本性について、より詳しく論じることになる。その議論を理解するためには、アリストテレスが各「元素」をどのようなものとして捉えていたかをあらかじめ理解する必要がある。アリストテレスによると、各元素は、それ自体は不可視である質料的な「基体」と「第一性質」（温・冷・乾・湿）とが組み合わされたものである。そして、このような「第一性質」は常にある一定の組み合わせの形で存在しているという。ただし、「温」と「冷」、「湿」と「乾」のような同系列で、かつ対立する組み合わせは存在しえないので、実際の組み合わせで存在するのは四種類のみだ（「温・乾」「温・湿」「冷・湿」「冷・乾」）。重要なことは、この四種類の「第一性質」の組み合わせが、四元素に正確に対応していることである。「温・乾」は「火」に、「温・湿」は「空気」に、「冷・湿」は「水」に、「冷・乾」は「土」に対応しているのである（*GC* II.3, 330a30-330b7）。

第二巻第二章から第四章におけるアリストテレスの「元素」の「生成・消滅」に関する議論では、まさにこの「第一性質」の組み合わせと「元素」の対応関係が重要な意味合いを持つ。というのも、四つの「元素」を各々に区別しているのは、対立する「第一性質」の組み合わせの違いでしかないので、「第一性質」の組み合わせの変化が、「元素」という実体自体の変化をももたらすと主張されるからだ。例えば、「温・乾」の組み合わせが「温・湿」へと変化すれば、自ずから対応する元素も「火」から「空気」へと変化することになるのである（*GC* II.4, 331a26-b2）。つまり、アリストテレスにとって、四元素の「生成・消滅」とは、元素を構成する「第一性質」の組み合わせが変化することでしかないのだ。

アリストテレスの議論をまとめよう。

1. 厳密な意味での「生成・消滅」は、「実体」の変化であり、（「質」「量」「場所」といった）「付帯的性状」の変化と区別されなければならない。
2. 四元素の「生成・消滅」とは、それら元素同士の相互変化であり、その変化のなかで変化を被らない「基体」が存在し続ける。
3. 四元素の「生成・消滅」は、対立する「第一性質」の組み合わせの変化によって生じる。

このようなアリストテレスの議論は、彼の自然哲学の内部に深刻な理論的困難をもたらすことになる。というのも、元素の「実体」を構成するのが、（各元素に対して無差別に存在し続ける質料的な「基体」と）四つの「第一性質」の組み合わせの差異でしかないとすれば、各「元素」の実体性あるいは本質は、それらの「付帯的性状」の一つである「性質」へと還元されてしまうからだ。元素の実体的変化を、元素同士の相互変化だとする理論は、結果的に（実体的変化である）「生成・消滅」と「質的変化」との差異だけでなく、「実体」と「付帯的性状」との決定的な差異をもないものにするのである。また、元素が四つの「第一性質」の振る舞いによって説明されるならば、この自然世界の事物は元素の複合から成立しているのだから、より複雑な自然現象についても、「実体的形相」や「目的因」といったアリストテレス主義の自然哲学において一般的に重要と考えられている形而上学的な理論が不要になりうる。こうして四元素の「生成・消滅」の議論は、アリストテレス哲学全体の枠組みを規定する点で、重要な意味を持っている。では、このような理論的課題に対して、後のアリストテレス主義者の二人―― アヴェロエスとアルベルトゥス――はどのように対応したのだろうか。以下では、これらの問題への対応を考察の中心に置きつつ、彼らの「生成・消滅」についての議論を検討することにしよう。

3. アヴェロエスによる「生成・消滅」の《自然主義》的解釈

アルベルトゥスの作品を見る前に、彼にとってアリストテレス解釈の前提となったアヴェロエスの議論を検討しよう[9)]。アヴェロエスは自然の事物の「生成・消滅」について、彼自身の見解を端的に記した独自の著作を記すことはなかった。あくまでアリストテレスのテクストの忠実な解釈という形で見解を述べたのである。したがって、アヴェロエスの考えを知

---

9) アヴェロエスの『生成消滅論』の註解のテクストとしては、次のものを用いた。*Averrois Cordvbensis Commentarivm Medivum in Aristotelis De Generatione et Corrvptione Libros*, ed. F.H. Fobes (Cambridge, MA, 1956). 邦訳は著者（タカハシ）による。引用する場合は、*MCGC* と略記した上で、上記のテクストの該当ページ数を記す。

るには、彼がどのようにアリストテレスのテクストを理解したのか、そしてその過程で元のテクストといかなる点で異なる見解を示したのかを注視することになる[10)]。

アヴェロエスが「生成・消滅」について論じているのは、アリストテレスのテクストに正確に対応する『生成消滅論』第一巻第一章から第三章と同第二巻第一章から第四章への註解である。アヴェロエスは基本的にアリストテレスのテクストを多かれ少なかれ反復しながら説明する。したがって、そこで述べられていることの大半はアリストテレスが述べていたことそのものか、その敷衍・要約でしかない。だが、アリストテレスの哲学の枠組みの内部に、理論同士の矛盾や齟齬が生じていた場合、アヴェロエスはアリストテレスの他の著作の議論などを援用しつつ整合的な解釈を提出しようとし、結果的にアリストテレスの元の議論との間に相違点が生まれることになる。したがって、本節でとりわけ注目するのも、前節で指摘したようなアリストテレスの議論に内在する問題点に対して、アヴェロエスがいかなる応答をしたのかということである。そして、彼のその解釈にいかなる理論的な傾向が見られるのかという点だ。とりわけ、後に見るように、元素の「生成・消滅」が元素相互の変化であり、その変化をもたらすのが「第一性質」の組み替えでしかないというアリストテレスの理論が孕んでいる、元素の実体性、および元素の「生成・消滅」と「質的変化」の無差別化の問題は、アヴェロエスの議論を考える上で、注目すべき前提になるだろう。

『生成消滅論』第一巻第一章から第三章の註解にてアヴェロエスは、「実体」の変化である「生成・消滅」と、その他の「付帯的性状」の変化とを区別する。そして、「端的な生成は、この水からこの空気への〔変化の〕ように、あるものの、全体として〔ある〕これから〔別の〕これへの変化である」（Generatio simplex est transmutatio alicuius rei secundum totum ex hoc in hoc, ut hec aqua in hunc aerem）と主張する[11)]。端的な意味での「生成・消滅」とは、ある実体の別の実体への変化であるということになる。前節の内容を想起すれば、この説明がアリストテレスの見解をただ反復したものに過ぎないことは明らかであろう。

---

10) アヴェロエスの『「生成消滅論」註解』、その中でも「生成・消滅」の変化に関する議論に関しては、以下を参照。Josep Puig Montada, “Aristotle and Averroes on *Coming-To-Be and Passing-Away*,” *Oriens*, 35 (1996), 1-34.

11) *MCGC*, 21.

だが、アリストテレスの「生成・消滅」の相互性の議論、すなわち、あるものの「生成」が、他のものの「消滅」であり、逆に、あるものの「消滅」は、他のものの「生成」である、という見解を説明する場面では、アヴェロエスの議論はアリストテレスのものとは少々異なるものになる。

> 一つの同じものの消滅は別のものの生成である。というのも、あるものの消滅があるものの生成であるので、その時、必然的に生成は途切れることがない。なぜなら、質料である基体上での形相の継起によって、そこから端的な意味で生成が生じるところの、可能態にあるもの〔すなわち、質料〕が、形相という現実的に存在するものを欠くことがないからだ[12)]。

「生成・消滅」と呼ばれる変化が、あるものの生成と別のものの消滅であると理解している限りで、アヴェロエスはアリストテレスの理論を正確に反復していることは間違いない。そして、その実体的変化を通して不変である「基体」が存在することも彼は認める。だが、彼の説明は、アリストテレスと若干異なっている。というのも、アヴェロエスは、「生成・消滅」の実体的変化を、いわゆる「質料形相論」（hylomorphism）に依拠しながら説明するからだ。ここでアヴェロエスの念頭にあるのは、アリストテレスの『自然学』第一巻の議論であろう[13)]。『自然学』第一巻でアリストテレスは、事物の変化を「形相」「質料」「欠如」の三つの原理によって説明した[14)]。ここでいう「欠如」とは、「形相」の「欠如」であるので、実質的には「形相」と「質料」とが事物の変化を説明する根本的な原理であることになる。アヴェロエスは、何らかの実体を「形相」と「質料」との複合体であるとする見方、すなわち

---

12) *MCGC*, 26-27: “Corruptio unius et eiusdem rei est generatio alterius; quoniam, cum corruptio alicuius fuerit generatio alterius, tunc necesse est ut generatio non abscindatur, quoniam per successionem formarum super subiectum, quod est materia, non denudatur illud ex quo generatio fit simpliciter, quod est in potentia, ab aliquo ente in actu, quod est forma.”

13) Cf. Samuel Kurland, *Averroes on Aristotle’s* De generatione et corruptione*: Middle Commentary and Epitome* (Cambridge, MA, 1958), 124.

14) Cf. David Bostock, *Space, Time, Matter, and Form: Essays on Aristotle’s* Physics (Oxford, 2006), esp. 1-18.

アリストテレスの「質料形相論」を説明モデルとして使うことにより、「生成・消滅」を、不変の「質料」の上で「形相」のみが連続して変化するプロセスだと解釈することになったのである。この見方によると、「生成・消滅」という現象は、「質料」自体は何の変化も被らないまま、それが新しい「形相」を受け取ったり、古い「形相」を脱ぎ落としたりといった過程として、より単純なモデルで理解されることになる。「形相の継起」（successio formarum）というアリストテレス自身の著作には見られない言葉を用いて説明するのも、それゆえである[15]。

「生成・消滅」を、不変な「質料」の上での「形相」の継起的な変化であるとする見方は、『生成消滅論』第二巻第一章から第四章の註解における「元素」の「生成・消滅」に関する議論を見ることで、より明らかになるだろう。アヴェロエスも、アリストテレスの議論を反復しつつ、元素の「生成・消滅」すなわち実体的変化とは、元素同士の相互変化のことであると考えていた。したがって、「どの〔元素〕も〔他の〕全ての〔元素〕から生成することができることは明らかである」とアヴェロエスは認める[16]。彼はこの教義をアリストテレスの元素の構造に対する考えを前提することで打ち出している。

> アリストテレスは言う。ところで私たちは、全ての可感的な物体は、可能的に存在しかつ対立する〔性質の組み合わせ〕を欠くことがない質料を備えているということ、そしてこれら四つの物体〔= 四元素〕は、この〔質料〕と、そこにおいて存在している対立する〔性質の組み合わせ〕から成立しているということを明らかにした[17]。

元素が、対立する「第一性質」の組み合わせと、「基体」である「質料」との組み合わせによって成立していると考えている点で、アヴェロエスはアリストテレスの考えを反復して

---

15) 「形相の継起」（successio formarum）という概念については、以下を参照。Edith D. Sylla, “Medieval Concepts of the Latitude of Forms: The Oxford Calculators,” *Archives d’histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge*, 40 (1973), 223-283.

16) *MCGC*, 112: “Et manifestum est quod omne ex omni potest generari.”

17) *MCGC*, 98: “Dixit Nos autem declaramus quod omnia ista corpora sensibilia habent materiam existentem in potentia, non denudatam ab aliquo contrariorum, et quod hec corpora quatuor componuntur ex ea et ex contrarietate existente in ea.”

いる。だが、元素の相互変化を説明するために、アヴェロエスは「第一性質」の再編成にアピールするだけでなく、元素の「形相」の変化に言及する。

> そして、これら四つの〔性質〕は結合されたものとしてのみ見出されるので、これらの〔性質〕がその形相であるところの物体の数は、これらの第一性質の可能な組み合わせの数と対応していることは明らかである[18]。

ここで「第一性質」の結合されたもの、すなわち組み合わせが、元素の「形相」であることが述べられている。実際、ここまで見てきた『生成消滅論』に対するアヴェロエスの「中註解」ではなく、同書に対する「小註解（提要）」のなかでは、「これら〔単純な物体、すなわち四元素の〕近接質料は、すでに明らかにされたように、第一質料である。それら〔四元素〕の形相は、そこに内在する対立した第一の〔性質〕である」（Materia propinqua eorum est materia prima, ut declaratum est. Formae autem eorum sunt prima opposita, quae sunt in eis）という形で、対立した性質の組み合わせである「第一性質」が、元素の「形相」であることがより明瞭な形で述べられている[19]。

このように元素の実体的変化を議論するとき、アヴェロエスは元素に対するアリストテレスに内在した二つの見方を組み合わせていると考えることができる。つまり、アリストテレスが『生成消滅論』で本来示したような、元素を「第一性質」と「基体」との複合であると考える見方と、『自然学』で展開されているような実体の「質料形相論」的な見方とである。確かに、どちらの見解もアリストテレスに由来する。しかしながら、『生成消滅論』の中でアリストテレス自身は元素の「形相」を「第一性質」の組み合わせであるとは述べていなかった。対して、アヴェロエスにとって「第一性質」の再編成とは、元素の「形相」の変化のこ

---

18) *MCGC*, 107: “Et cum iste quatuor non inveniantur nisi coniuncte, manifestum est quod numerus corporum quorum iste sunt forme est secundum numerum compositionum possibilium istis qualitatibus primis.”

19) *Aristotelis opera cum Averrois commentariis*, 9 vols. (Venice, 1562-1574; repr. Frankfurt, 1962), V, f.392K. Cf. *Ibid.*, f.392K: 「したがって、これら〔性質の対立〕は必然的に第一物体の形相であると主張しよう。」（*Dicamus igitur quod necesse est ut istae sint formae corporum primorum*）

となのである。

元素の（実体性を規定する）「形相」を、「第一性質」の組み合わせと同一視することは、アリストテレスの『生成消滅論』に潜在していた、自然現象を《自然主義》的に説明しようとする理論的傾向を、より明示的なものにすることになる。ここで《自然主義》的と形容するのは、自然の諸現象を（「実体的形相」「目的因」といった《形而上学》的な原理をことさら重視することなく）物質的な「第一性質」の変化によって説明しようとする態度のことだ。アヴェロエスにとって、元素の「実体」を規定するものは（本来「付帯的性状」であるはずの）「第一性質」であり、四元素における「生成・消滅」は「質的変化」と同一視される。ここにアリストテレス主義内部における《自然主義》的な自然理解の基礎が見られるのである。

強調されるべきことは、アヴェロエスの《自然主義》的な理論的傾向は、アリストテレスにおいて明示的には述べられないまでも、この古代ギリシアの哲学者の理論を整合的に理解しようと努めれば、当然帰結する考えであることだ。古典的にはアンネリーゼ・マイアーが主張したように、アヴェロエスが元素の「形相」を「第一性質」（の組み合わせ）と同一視する時、それは「元素についての真正なアリストテレス的概念」なのである[20]。別の観点から言えば、もし後世のスコラ学者がアヴェロエスに見られる見解を否定する場合があるとすると、彼らはアリストテレスの見解から離れ、元素に実体性あるいは本質を付与する、別の（温・冷・乾・湿といった物質的な原理に還元されない）《形而上学的》な原理に訴えているということもできるだろう。そして、まさに私たちが後で見るようなアルベルトゥスの議論は、アヴェロエスの「真正なアリストテレス的概念」にたいして、より《形而上学的》な立場を主張するものだと見ることができるのである[21]。

---

[20] Maier, *An der Grenze*, 43.

[21] ただし、アヴェロエスの《自然主義》的解釈は、彼特有のものではなく、古代からのアリストテレス主義の伝統の中で一般的なものであったことは注意されるべきだ。この点で注目されるのはアフロディシアスのアレクサンドロスの議論である。ハイドルン・アイヒナーが正しく指摘したように、「（アヴェロエスの『生成消滅論』注解のなかで）唯一言及される注解者が、アレクサンドロスだ」からだ（Heidrun Eichner, “Ibn Rušd’s Middle Commentary and Alexander’s Commentary in Their Relationship to the Arab Commentary Tradition on the *De Generatione et Corruptione*,” in C. D’Ancona and G. Serra (eds.), *Aristotele e Alessandro di Afrodisia nella tradizione araba*

4. アルベルトゥスによる「生成・消滅」の《形而上学》的解釈

では、最後にアルベルトゥスの議論を、アヴェロエスの註解を踏まえつつ、検討することにしよう[22]。アヴェロエスと同様に、アルベルトゥスも「生成・消滅」という変化に関して、独自の著作を残したわけではない。彼もあくまでアリストテレスのテクストの解釈という形で自身の見解を示したのである。したがって、彼の議論の大半も、実際はアリストテレスのテクストの単なる説明あるいは要約的なものである。だが、アルベルトゥスはアリストテレスの著作のみを前にして作業をしていたわけではなかった。彼はアヴェロエスの註解書も参考にしつつ、アリストテレスの議論を理解しようとしたのである。ただし、後で記すように、アルベルトゥスはアヴェロエスの解釈を単に反復したのではない。逆に、その《自然主義》的な解釈の伝統を前提とした上で、それに批判的に対峙したのである。

では、まず『生成消滅論』第一巻第一章から第三章におけるアリストテレスの説明を見ることにしよう。端的な意味での「生成・消滅」の意味を議論する際に、アルベルトゥスは

(Padua, 2002), 281-297, esp. 287)。アレクサンドロスの『生成消滅論』の註解は断片しか伝わっていないが、下記のテクストを参照せよ。Emma Gannagé, *Alexander of Aphrodisias: On Aristotle's On Coming-to-Be and Perishing 2.2-5* (Ithaca, NY, 2005). 特に、アレクサンドロスが、元素の実体的変化と質的変化とを同一視していることについては、Gannagé, *Alexander of Aphrodisias*, 59-63 を見よ。

22) アルベルトゥスの『生成消滅論』のテクストとしては、次のものを用いた。*De generatione et corruptione*, ed. Paulus Hossfeld (Ed. Cologne, 5/2: 109-213) (Münster, 1980). 以下では、*DGC* と記した後に頁数を記す。邦訳は著者（タカハシ）による。このテクストについては、次の文献を参照。Paul Hossfeld, "Grundgedanken in Alberts des Großen Schrift Über Entstehung und Vergehen," *Philosophia Naturalis*, 16 (1976), 191-204; Stefano Caroti, "Note sulla parafrasi del *De generatione et corruptione* di Alberto Magno," in F. Cheneval et al. (eds.), *Albert le Grand et sa réception au moyen âge : hommage à Zénon Kaluza* (Separatum de *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie*, 45 (1998), 1-2), 6-30.

忠実にアリストテレスの議論を反復するように見える。彼は「生成・消滅」を、少なくとも「実体への変化」（mutatio in substantiam）であると規定する[23]。アリストテレスにならい、実体的変化である「生成・消滅」と、「性質」の変化である「質的変化」（alteratio）とを明確に区別しているのである。

アリストテレスの見解を整理した後、アルベルトゥスは「生成・消滅」についてより詳細に検討し始める。彼は幾つかの問いを立てる形で議論を展開するが、そこで最も重要だと思われるのは、「なぜ生成〔・消滅〕が持続的かつ無限であるのか」という問いである[24]。アリストテレスが「生成・消滅」の永続性を、二つの観点で説明したことを私たちは想起する必要がある。第一に、変化前と変化後の二つの実体は、その変化によっては影響を受けない「基体」を共有している必要があるということ。第二に、ここまでも何度か強調したように、「生成・消滅」は、あるものの「生成」が別のものの「消滅」であるというように、相互的な性格を持つという点だ。では、アルベルトゥスは、このような理論にどのように応答するのだろうか。

> こうして、〔あるものは〕現実的にある形相のもとにあり、可能的には別の〔形相〕のもとにある。この不安定さ（inquietudo）の原因は質料の無限への欲求である。というのも、〔質料は〕一つの形相だけではなく、すべての形相を継起的に欲求するからである。なぜなら、〔質料は〕これらの〔形相を〕同時には保持できないからだ。ところで、この欲求は質料に内在する「形相の萌芽」であり、それは〔質料〕自体から引き出される[25]。

---

[23] *DGC*, I, t.1, c.2, p.112, lns.15-20: “Dico autem simplicem generationem, quae pure et vere est universalis generatio, mutatio scilicet in substantiam universaliter, de qua intendimus hic, sive etiam simplicem generationem, quae est generatio elementi, de qua in secundo huius voluminis loquemur.”

[24] *DGC*, I, t.1, c.19, p.126, lns.38-42: “Determinatis autem his postea videndum, utrum generatur simpliciter aut corrumpitur aliquid, ut prima nostra quaestio sit, an sit generatio; et secunda, quid subicitur generationi; et tertia, quare continua et infinita sit generatio.”

[25] *DGC*, I, t.1, c.22, p.130, 23-29: “Est igitur actu sub una forma et potentia sub altera, et causa inquietudinis eius est materiae desiderium in infinitum, quod non desiderat formam unam tantum,

アルベルトゥスは、「生成・消滅」の相互性を、「質料形相論」的なモデルに従って説明する[26]。彼は、「生成・消滅」の変化とは、変化を被らない「質料」の上で「形相」のみが「継起的に」（successive）変化することだと考えている。単なる「質料形相論」の導入にとどまらず、形相の「継起的」な変化というアリストテレス自身には見られない用語を導入している点で、アルベルトゥスがアヴェロエスの議論を前提にしていると言えよう。

だが、「基体」である「質料」の性質について、アルベルトゥスはアリストテレス（そしてアヴェロエス）と微妙に異なる見解を提示している点も注意される必要がある。アリストテレスとアヴェロエスにとって、「質料」は「形相」がそこから生じる可能性を有した「基体」としての役割を担っているに過ぎなかった。彼らにとって、質料は、現実的な形相を欠くならば、あくまで可能的な存在にとどまっている存在でしかなかった。対して、アルベルトゥスは質料を半能動的な事物として描き出す。この意味で、質料に能動的な原理として、「形相の萌芽」（incohatio formae）が存在すると述べるのだ[27]。

次に『生成消滅論』第二巻第一章から第四章のアルベルトゥスの注釈を見ていくことにしよう。すでに見たように、アリストテレスは「元素」の「生成・消滅」を二つの原理に依拠することで説明していた。「質料」とも呼ばれる「基体」と、「温・冷・乾・湿」という「第一性質」の組み合わせである。それにたいして、アルベルトゥスは、「基体」（subiectum）と「（第一）性質」（qualitates）とが、それぞれ元素の「質料的原理」（principium materiale）と

---

sed omnem formam successive, cum simul eas habere non possit. Hoc autem desiderium formae incohatio est in materia, quae educitur de ipsa, [...].”

26) 自然の事物に関するアルベルトゥスの「質料形相論」的理解については、以下を参照。David B. Twetten, Steven Baldner, and Steven C. Snyder, “Albert’s Physics,” in Irven M. Resnick (ed.), *A Companion to Albert the Great: Theology, Philosophy and the Sciences* (Leiden, 2013), 173-219, esp. 173-182.

27) *DGC*, I, t.1, c.22, p.130, 27-30: “Hoc autem desiderium formae incohatio est in materia, quae educitur de ipsa, sicut declaratur in Philosophia prima.” 「形相の萌芽」については、以下を参照。Bruno Nardi, *Studi di filosofia medievale* (Rome, 1960), 69-101; Steven C. Snyder, “Incohatio Formae, and the Pure Potentiality of Matter,” *American Catholic Philosophical Quarterly*, 70 (1996), 63-82.

「形相的原理」（principium formale）であると述べる[28]。アヴェロエスがそうであったように、アルベルトゥスもアリストテレスの議論を「質料形相論」的観点から理解しているのである。

> というのも、これらの諸元素は共通の質料と、対立〔する性質〕とを持っている。なぜなら、それら〔諸元素〕は互いへと変成するからであり、火が水や他のものになるように、ある〔元素の〕形相のもとにあった質料は、別の〔元素の〕形相のもとにもたらされるからだ[29]。

この引用部は、アルベルトゥスが四元素の実体的変化を、各元素の有する「第一性質」の組み合わせの再構成であると考えていたことを示している。『生成消滅論』第二巻第四章の注解のなかで、彼が「強められた諸属性は、それら〔元素〕の実体を別の物に変化させる」[30]と述べる時も、同じことを意味していると考えてよいだろう。重要なことは、アルベルトゥスが「第一性質」の組み合わせの変化を、元素の「形相」の変化と対応させて理解していることである。アリストテレスは、確かに「第一性質」の変化が元素を変化させるとは述べたが、それが「形相」の変化であるとは述べなかったことは、改めて注意されるべきだ。

だが、アルベルトゥスは他方で、元素の「形相」と「第一性質」との同一視を批判しようとする。このことを「第一性質は元素の実体的形相ではない」（Primae qualitates non sunt formae substantiales elementorum）と題された「脱線」（digressio）部分で彼は説明している[31]。この「脱線」部分で、確かに、彼は「第一性質」が基体となっている質料を四つの「元素」へと差異化することは認めている[32]。しかし、彼は元素の「形相」と「第一性質」

---

28) Cf. *DGC*, II, t.1, c.5, p.179, lns.37-42.

29) *DGC*, II, t.1, c.4, p.179, lns.24-28: “Haec enim elementa habent materiam communem et contrarietates, quia ad invicem transmutantur, et materia, quae fuit sub unius forma, efficitur sub forma alterius, sicut ignis fit aqua vel aliud.”

30) *DGC*, II, t.2, c.1, p.186, lns.11-12: “Passiones intensae transmutant substantiam eorum ad invicem.”

31) *DGC*, II, t.2, c.7, p.190.

32) *DGC*, II, t.2, c.7, p.190, lns.17-21: “licet primae qualitates distinguant elementorum materiam et dicantur primae differentiae elementorum, ita quod elementa differant et in numero ponantur penes

の組み合わせとの区分に固執するのである。アルベルトゥスによれば、「第一性質」は「それら〔元素〕の実体的形相ではない。なぜなら、アリストテレスは、実体は能動的でも受動的でもないと述べたからだ」という[33]。「第一性質」は、温・冷は能動的、乾・湿は受動的といった性格を帯びている。こうして、アルベルトゥスは元素の「形相」は、「第一性質」の組み合わせと同一視できないと結論するのである。

なぜアルベルトゥスは、この区分に固執したのだろうか。この点を考える上で、ここまで関連性を指摘してきたアヴェロエスに加えて、アヴィセンナ（ca. 970-1037）の影響を考慮する必要がある。というのも、アヴィセンナは自身の『生成消滅論』のなかで、実体的変化と質的変化を同一視する「註解者たち」（commentatores）の見解に異議を唱えているからだ[34]。だが、アヴィセンナの『生成消滅論』をアルベルトゥスが読むことは不可能であった。というのも、アルベルトゥスが活動していた時代に、この著作はまだラテン語訳されていなかったからである[35]。ただし、アヴィセンナの『生成消滅論』が仮に手に入らなかったとしても、その見解が別の著作の翻訳を通して知られていた可能性はある。というのも、アルベルトゥスはアヴィセンナの『形而上学』を参照していたからである。その著作でアヴィセンナは「実体は付帯的性状の存在を構成するのであり、付帯的性状によって構成されるのではない。したがって、実体は存在の点で〔付帯的性状に〕先行する」と述べる[36]。実際、『気象論』（*Meteora*）第四巻においてアルベルトゥスは、「アヴィセンナとアル・ガザーリー

---

coniunctiones ipsarum [...].”

33) *DGC*, II, t.2, c.7, p.190, lns.21-23: “... non tamen sunt substantiales formae eorum, quia dicit Aristoteles, quod forma substantialis nec activa nec passiva.”

34) Avicenna, *Liber tertius naturalium de generatione et corruptione*, ed. Simone Van Riet (Leiden, 1987), 63. Cf. Jon McGinnis, *Avicenna* (Oxford, 2010), esp. 84-88.

35) アヴィセンナの『生成消滅論』のラテン世界における受容については、以下を参照。Simone Van Riet, “Le *De generatione et corruptione* d’Avicenne dans la tradition latine,” in Thijssen and Braakhuis (eds.), *The Commentary Tradition on Aristotle’s* De generatione et corruptione, 69-77.

36) Cf. Avicenna, *Liber de philosophia prima sive Scientia divina*, ed. Simone Van Riet, 2 vols. (Leiden, 1977-83), I, l.1, t.2, c.1, 66: “Unde substantia est constituens esse accidentis, nec est constituta ab accidente; igitur substantia est praecedens in esse.”

は実体的形相が能動的な性質〔= 温・冷〕に由来するものではないと結論付けた」と言及している[37]。したがって、アルベルトゥスが、アヴェロエスの《自然主義》的解釈を退けるとき、「実体」（あるいは「実体的形相」）と「付帯的性状」を峻別するアヴィセンナの見解を踏まえた可能性は高い。

しかし、問題はむしろここから始まるのである。もし単純にアルベルトゥスがアヴィセンナの見解の影響を受け入れたとするならば、アヴィセンナの「形相付与者」（dator formarum）と呼ばれる原理も導入したであろう[38]。この「形相付与者」とは、自然の事物の生成時に、元素の混合が整った段階で、そこに実体的形相を導入する超越的な原理としてアヴィセンナが提唱した概念であり、彼はこれを「能動知性」（すなわち、月の天球の知性）と同一視した。だが、アルベルトゥスは、この「形相付与者」という形而上学的原理にたいしては一貫して否定的な立場を崩さないのだ。したがって、私たちはアルベルトゥスがアヴェロエスの解釈を批判する際に、アヴィセンナの見解を採用したと短絡的に結論づけることは不可能なのである。

5. 結論

以上では、アルベルトゥスが、どのようにアリストテレスの（特に四元素の）「生成・消滅」の議論を解釈したのかを、アヴェロエスの註解も考慮する形で検討してきた。アルベルトゥスの議論は、アリストテレスの元の議論、アヴェロエスによる註釈、アルベルトゥス自身の解釈という形で、テクストが少なくとも三層構造をなしていることになる。であるから、アルベルトゥスの主張を理解することは、このテクストの重層性を解きほぐしつつ、こ

---

[37] Albert, *Meteora*, ed. Paulus Hossfeld (Ed. Cologne, 6/1) (Münster, 2003), IV, t.1, c.4, p.215, lns.2-4: “Avicenna et Algazel concedebant formam substantialem non esse a qualitatibus activis.”

[38] Cf. Dag N. Hasse, “Avicenna’s ‘Giver of Forms’ in Latin Philosophy, Especially in the Works of Albertus Magnus,” in Dag N. Hasse and Amos Bertolacci (eds.), *The Arabic, Hebrew and Latin Reception of Avicenna’s Metaphysics* (Berlin, 2012), 225-249.

のテクストの形成過程をいったん逆に遡った上で、そこから改めてアルベルトゥスのもとへと立ち戻る作業を要することになった。

まず本稿での議論を簡単に確認しよう。まず「生成・消滅」と呼ばれる変化に関するアリストテレスの議論を簡単に整理した。アリストテレスは「生成・消滅」という実体的変化と他の付帯的性状の変化とを厳密に区分した。特に『生成消滅論』で議論されている「生成・消滅」とは、自然の事物一般の生成や消滅ではなく、基本的に「元素」の生成消滅であった。そのことは、彼が「生成・消滅」を、あるものの生成とあるものの消滅とが同義であると論じたことから明らかであった。この生成消滅の相互性を主張するために、アリストテレスは元素を構成する二つの原理に注意を促した。それは「基体」と「第一性質」である。重要なことは、元素の実体的変化とは、この「第一性質」の組み合わせが変化することであると彼が論じたことだ。

次に、アヴェロエスの《自然主義》的解釈を検証した。アヴェロエスは、解釈の際に二つの変更をもたらした。一点は、彼が「質料形相論」に依拠しつつ、元素の実体的変化を、同一の質料上で形相のみが継起的に変化することであると定義したことだ。第二に、彼が「第一性質」の組み合わせを元素の「形相」と同一視することをためらわなかった点だ。

アヴェロエスの解釈を踏まえた上で、最後にアルベルトゥスの議論を検討し、彼がアヴェロエスの示した解釈の大枠を踏まえつつも、その《自然主義》的解釈に批判的であったことを論じた。アルベルトゥスは、アヴェロエスと同様に、元素の構成を説明する際に質料形相論的なモデルにしたがっていたが、元素の「形相」と「第一性質」とを同一視することには反対だったのである。物質的な「性質」には還元されない「実体的形相」を擁護している点で、アルベルトゥスの立場を《形而上学》的な立場であると見なすことができる。四元素が、この世界の事物を構成する最も基本的な原理である限り、この《自然主義》的立場と《形而上学》的な立場との対立は、『生成消滅論』の解釈を超えた意味を持つことになるだろう。

以上の議論によって、残されている課題がある。それはアルベルトゥスが、なぜアヴェロエスの《自然主義》的な解釈を退けたのかという点だ。先にも注記したように、アヴェロエスの「元素」（の「生成・消滅」）にかんする理論は「真正なアリストテレス的概念」（アンネリーゼ・マイアー）なのだ。したがって、（これまでのアヴェロエス主義をめぐる議論で無

反省に言及されてきたように）アヴェロエスの「誤った」解釈をアルベルトゥスが正した、のではないのである。この二人のアリストテレス主義者の立場の相違は、単なる『生成消滅論』の解釈という文脈を超えて、この世界を構成する原理についてどのように考えるのかという点で、二人の間に重要な相違があったことを示しているだろう。そして、この二人の対立と、その理論的背景については、霊魂の不死性などのより神学的な論点とともに改めて再考されるべき課題だと私は考えている。

［筆者：白百合女子大学・非常勤講師］

Summary

The Art of Commentary in Medieval Natural Philosophy: Albert the Great's Critique of Averroes in the Paraphrase of Aristotle's *On Generation and Corruption*

Adam TAKAHASHI

The present article explores how Albert the Great (ca. 1200-1280) dealt with the structure of the four sublunary elements in his paraphrase of Aristotle's *On Generation and Corruption*. In this paraphrase Albert addressed a question, which Aristotle himself did not posit: Can the substantial form of the elements be reduced to the primary qualities? To understand the issue, I examined how Albert relied on Aristotelian commentaries written by Averroes (ca. 1126-1198). Albert encountered Averroes who considered the elemental form to be composed of the four primary qualities. The Commentator presented this naturalistic position by combining Aristotle's two arguments. On the one hand, Aristotle claimed that the four elements consist of the primary qualities with the prime matter and that the essence of each element is determined only by these qualities. On the other hand, he regarded every sublunary body as a hylomorphic composite of form and matter. Since the essence of each element is determined by the combination of the qualities, these qualities must play the role of the formal cause. Furthermore, Averroes was also faithful to one dominant Aristotelian tradition which resorts to Alexander of Aphrodisias (fl. ca. 200AD) who identified the elemental form with the primary qualities. Criticizing this position held by Alexander and Averroes, Albert, in turn, advanced a metaphysical position that the elemental form cannot be reduced to the primary qualities.